環　境　と　服　装

奥平志づ江

1.　まえがき
2.　自然環境と服装
3.　社会体制と服装
4.　思想環境と服装
5.　むすび

1.　まえがき

文化はすべて環境の所産であり，環境の影響を受けて発展して行くものであることは論をまたないが，中でも服飾文化ほど敏感に環境の影響を受けるものは少いと思う。この事はまた，環境を窺い知る最も短的な手段が「服装の観察」であるとも云えよう。

環境の一次的な要素として，衣，食，住の基本的な生活条件が考えられるが，これはさらに外界の広汎な環境によって影境を受けることになる。ここでは特に「衣」について，環境との関係を考えてみたい。

2.　自然環境と服装

環境条件のうち，衣生活に最も関係の深いものは，季節的な天候と地理的な風土，いわゆる自然環境であろう。環境に順応して生存するための必要最低限の条件として衣服が生れ，生活条件のゆとりにともなう欲望から装飾的な服装即ち服飾へと発展して来たことは当然である。環境に順応出来る生物だけが適応する地域に生存できるのに対し，人類は積極的に環境の変化に耐えられる生存手段の一つとして，衣服を生み出し，服装を工夫発展させてきたわけである。人類発祥の地は，温暖で四季の変化がなく，衣服をほとんど必要としない赤道地帯であると推定するが，その正否は人類学者や歴史学者の判断に委ねるとして，おおよそ穴居生活をしたと考えられる原始時代には，衣服は身体保護と羞恥心から最少限必要な腰蓑程度の簡単なもの（第１図）に過ぎなかったことは，未開民族の服装をみても推定出来る。他の動物に比べて頭脳の成長期間が遙かに長く，歩行に脚だけで事足りる人類は，生活集団の構成人員が殖えるにしたがい，その好奇心と欲望を満たすため，知恵と努力を結集し，相互の摩察を避けて，新しい生活圏を求めて移動，拡散し，それぞれの新しい環境（季候，風土）に応じた生活を営むようになった，衣服もその環境で利用出来る材料（動物，植物）を使った簡単なもの（第２，３図）から食物，住居の変化，発展とともに権力，身分，職業，着用目的に応じた複雑，高度の装飾的，機能的なものに発展してきたことが容易に想像できる。また衣裳製作が職業化する以前は，ほとんど女性の役割であったこともたしかであろう。

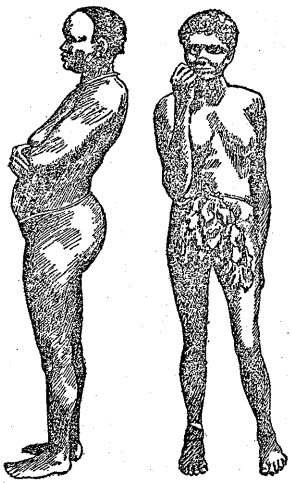

図 1　草葉の前垂

図 2　藁の腰蓑

図 3　毛皮にくるまったインディアン

3.　社会体制と服装

新しい生活圏を求めて，離散した集団は，それぞれの環境に応じた個有の文化を発展させ，地域社会から国へと，その規模が膨張するにしたがい，他の地域集団または国家との争いが頻発するようになった。また一方物欲と好奇心のため，交通機関の発達と相まって，平和的な交易も盛んになり，集団（民族）と文化の交流によって，服装の材料，形態とも，ますます多様化し，華麗なものへと，発展のテンポを増し，階級的，時代的に一種のモードが出来るようになった。然し近代に至るまで，社会体制は力による統治すなわち封建的政治体制であることに変りはなく，文化の興隆はおもに統治者の欲望に負うところが多いと評価することができよう。服装は，逆にこのような社会的環境によって規制を受けたわけで，今日のような個人の意志による自由な服装のモード既ちファツシヨンは産まれなかったわけである。

4.　思想環境と服装

思想環境も社会体制と時代環境から切り離して考えることはできないが，ここでは主としてこれら環境条件に影響された個人的，社会的な思想の背影と服装のモード，今日でいうファツションとの関係について考えてみたい。海外旅行をして，最初に印象的に目についたものは人々の服装である。ソビエトで感じたことは，軍服姿が多いこと，広大な土地空間，建築物の壮大さ，一般人の地味な服装とノンビリムードであった。他のヨーロッパ諸国（自由主義の）では，人口密度の高い都市だけに限られた印象ではあるが，狭隘，混雑，無統制，カラフル，安易さ等を相対的に感じた。日本での感覚的な風潮は，ヨーロッパの自由主義の国々に近く，北米合衆国の都市のそれに，最も近似していると思う。これらのことから，社会体制，特に思想環境の相違が短的に人々の服装に現れるとの発想は誤っていないと考える。社会体制または権力者によって強制された服装，または自然環境に支配されて，機能的な服装を集団的に採用した場合，いずれも自由

な思想の表現（個人の好み）によるものではないから，ファツションとは言えない。したがって，原始時代または未開人の簡単な服装(腰蓑，腰巻，褌など)，或る地方特有の伝統的な（長期間変らない）民族服（ベール，ドレパリー，サリー，中国服）（第４～８図），職業服等（アカデミックコスチューム，制服，軍服等）（第９，10図）はファツションではない。しかし，これらの服装またはモードが或る期間を経て共通的にファツションとなって再現する場合はある。要するにファツションは，

(1) 思想的（自由意志か，強制か）

(2) 地域的（或る程度の広がり）

(3) 時間的（或る期間連続して）

(4) 変革性（反復を含む）等の如何によって定義されると考へる。

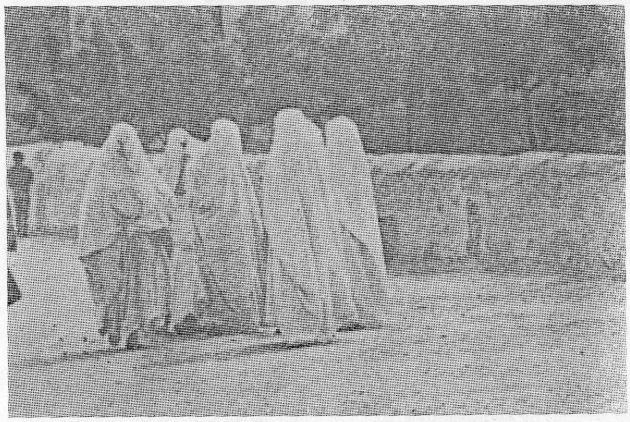

図 4　ベールをつけたアラブ人

図 5　アラビアの民族服
ドレパリー

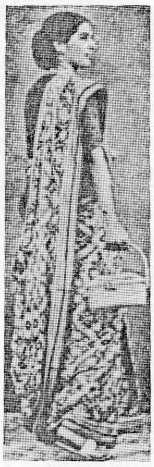

図 6　インドのサリー

図 7　中国服

図 8　カリーブの毛皮をきた
エスキモーの子供

図 9　アカデミック
コスチューム

図 10　赤十字の制
服

5.　むすび

国家的，社会的，組識的の規制が強まれば，組織体の力をその目的に向って効果的に集中することは出来るが，個人の思想，欲望は大きく制約を受けるので，服装も自由，卒直な思想の表現にはならないことになる。元来ファッションは上流，貴族社会の風俗，習慣を意味したもので，下層階級では，階級的，経済的の制約を受けて，服装による思想の表現はほとんど不可能であったわけである。服装のファッションは，或る地域の，或る時期の，不特定多数の人々の，共通のみなりであるから，その意味では，その地域の，その時代の思想の表現でもある。また言葉を換えると，個人の自己顕示，同調性（模倣性），適応性（趣味，感覚），好奇心等の欲望の表現であり，或る程度多数の人に，同時代の，或る期間，共通して現れたモードである。一言で云えば，ファッションは個人の思想が共通の形で表現されたものであり，ファッション・デザイナーによってではなく，その時代の人々によってつくられるものである。

クリスチャン・ディオールやピーエル・カルダン等の有名なファッション・デザイナーは，その時代の人々の思想を服装のモードに表現する能力を持っているわけで，その時代の人々にアピールし，思想の表現として共感を得た場合に，そのモードは共通して採用されファッションが作られる。つまりファッション・デザイナーはファッション・リーダーではあるがファッション・メーカーではない。以上殊の外ファッションに重点をおいた嫌いはあるが，服装がその起源から歴史の続く限り，自然環境（人類を含めて）と社会環境（思想，政治，経済の背影）に影響されて伝統的に定着し，またはファッションの形で変革するものであることを強調したつもりである。変革のペースも，社会環境の変化に左右されることを考えた場合，現代のような，めまぐる

しいファツションのテンポは消費の増大を招き，必然的に物資の量産体制につながり，生産過程の有害な癈棄物（使いすての物資を含めて）の増加による公害の発生から生産の縮少，物資の欠乏，経済状況の悪化，消費の抑制へと連鎖反応を起し，結果的にはファッションの停滞または逆行さえ想像できる。

参考文献

1) 古代服飾文化史，石山彰，1956.
2) 被服文化，79号，文化出版局，1963.
3) 被服文化，84号，文化出版局，1963.
4) 服飾事典，田中千代，1969.